

〔第28回学術集会 共催シンポジウム〕

## 新たな看護実践の枠組みを創る —SCNs (Social community nurses) による看護実践—

東海大学

東京慈恵会医科大学

(座長) 井上 玲子

児玉久仁子

このシンポジウムは、高齢化の加速、労働人口の減少、感染症の流行など、多くの課題を抱える医療・看護・介護の現場で、意味深い活動や新規事業にチャレンジしている看護職たち (Social community nurses) を御紹介し、新たな看護実践を考える目的で開催しました。

このたび共催をさせていただいた一般財団法人オレンジクロスは、日本の地域ケアへの貢献を目的に2014年に設立された団体で、研究や新たな看護・介護事業に取り組まれています。そこで本シンポジウムでは、4名のシンポジストにご登壇いただき、包括ケアシステムに資する地域の特性に沿った看護実践をご紹介いただきました。

大田章子先生には、「地域にアウトリーチする病院～Withコロナ時代のつなぎ人としての看護職」と題して、地域連携による「まちづくり」の視点から介護予防、生活支援など保健師を中心とした活動を紹介していただきました。

中山法子先生には、「地域を横断的に活動する診療看護師の活動～家族への関わりを振り返る～」と題して、地方都市部やへき地医療、離島などでの看護外来の実際、その中で出会う家族を通じて見えてくる家族ケアの難しさや課題などをお話していただきました。

中村順子先生には、「ホームホスピスくらの家における家族看護実践—大切なひとを見送る家族へ

の疑似家族としての看護を考える—」と題して、ホームホスピスの活動をご紹介いただきました。看取りにかかわる介護職との協働や看護職の役割など、教育的視点からご示唆をいただきました。

川添高志先生には、「病や障害があっても外出できる世の中を実現するために“交通医療”という新たな枠組みを創出」と題して、具体的な事業内容をご紹介いただきました。加えて医療的ケアや認知症など、外出時のサポートが必要な人に対し、公的支援や家族に代わる Third Supporter としての新たな「シェアリングヘルスケア」という概念とその実際をご提示いただきました。

ご講演終了後、一般財団法人オレンジクロス理事の田中滋先生より、ソーシャル・コミュニティで活躍する看護職への期待とエール、今後の示唆をいただきました。特に4名のシンポジストの方々より、当事者と家族のための新たな看護実践を発信していただいたことで、明日への活力・原動力を感じる時間となりました。

2021年12月現在、感染症の終息が見えぬ中、医療現場はまさに混沌とした様相を呈しています。多職種の協働はもとより、患者・家族らと手を取り合い、新たな知恵を互いに共有することが重要となるでしょう。この状況を乗り越えていくためには、既存の枠組みにとられない地域のニーズから、手段を見出していくことが必要なのかもしれません。